

## 研修報告書 No.9

所 属： 東京大学医学部附属病院

氏 名： 井上 大輔

研修先： 大月病院、沖の島へき地診療所

平成 30 年 12 月の 1 ヶ月間、高知県大月町大月病院で地域研修をさせていただきました。大変貴重な経験をさせていただき、このような機会をいただきましたことを心から感謝しております。自信を持ってこの病院での研修を未来の研修医の皆さんにも薦めます。

大月町は人口約 5000 人の高知県南西端に位置する町です。国道 321 号線が縦断し、北と東に位置する宿毛市と土佐清水市をそれぞれ結んでいます。大月病院は大月町の臍の位置にあり、町民の方がどこからでも通院しやすいように約 30 年前に建てられました。国道 321 号線を大月病院のところで逸れて町の南西端に向かうと柏島へ通じます。この島は夏になるとスキューバダイビングの観光客が集まってくるということでした。町の中心地は大月病院から車で 10 分ほど北に行ったところにあり、コンビニやスーパー、学校などが集まっています。その他にも小さな集落が山間部や海辺に散在し、それを山間部の道路が結んでいました。これが大月町の概観です。

大月病院は町内唯一の病院であり、患者さんがことごとく集まってきます。また各集落や老人施設に往診も行い、まさしく大月町の人々の健康を一手に背負っていました。対象患者の年齢層は幅広く主訴も多岐に渡り、結果として医者には広い守備範囲が求められます。研修時に指導していただいたのは自治医科大学出身の若手の先生達 3 人でした。血液内科や消化器内科という各々の専門分野を生かす一方で、整形外科的疾患なども扱うという幅広い診療をしていました。専門化が進んだ病院での診療に慣れた自分からすると、非常に新鮮な環境でした。医者の代名詞とも言える「赤髭先生」とはまさしく大月病院で働く先生達のことです。このような先生達の努力が陰ながら地域を支えているということに心から感銘を受けました。一方で、沖の島という離島に診療に行く機会がありましたが、限られた医療資源をどのように配分するのか、住民の方々の健康をどのように担保するのか、そういう医療経済的な観点からは厳しい現実もありました。少子高齢化、都市一極集中が進む日本では同様の現実に苦しむ地域が数多くあります。そんな一極集中の権化ともいえる東京からきた自分がこのようなことを書くのは白々しく、心苦しくもありますが、今回肌で感じたことを少しでも周りに伝えていく義務があると感じました。

その一助として僭越ながら残りの紙面では大月病院の PR をさせていただきます。

ここでの研修は自分を医師として成長させてくれました。プライマリ・ケアとして多くの町内の患者さんを診察し、多岐にわたる疾患を経験することができました。インフルエンザや小児の喘息発作、裂傷など比較的軽症なものから、胆管癌、骨盤骨折、不安定狭心症、大

動脈解離、大腸癌による腸重積、魚骨による喉頭蓋炎などの重症疾患まで幅広く診ることができました。各症例について十分に検討し関連事項を調べる時間的余裕もあります。また、胃カメラや縫合などの創処理を相当数経験し、自信を持てる「守備範囲」が広がりました。大学病院では十分な手技に恵まれず、やや「欲求不満」だった自分にとっては素晴らしい環境でした。

また、ここでの生活の中では高知の自然や歴史を満喫することができます。少し車で行けば足摺岬や四万十川の絶景を拝むことができます。景色だけではなく、鯖や鯉といった魚を揚げたてほやほやの状態で、しかも東京よりはるかに安価な値段で楽しむこともできます。そしてやはり、高知といえば坂本龍馬。武市半平太や中岡慎太郎、そしてジョン万次郎といった幕末志士達、彼らゆかりの地がことごとく高知県にあります。他にも「この人高知県出身だったのか」という驚きと何度も遭遇しました。「例えば、」と書きたいところですが、字数の関係でこれ以上は控えることにします。兎にも角にも、現代日本の土台を作った人々の「生きた証」に直接触れること、それは感動と勇気を与えてくれます。

自然と歴史に囲まれ、ゆらりと流れる時間の中で医療に携わること。ものの見方が変わりました。研修先を再び選べと言われても、ここを選びます。夕暮れの柏島、大月町の満天の夜空、決して忘れません。

みなさんのおかげでした。心から感謝を申し上げます。